慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	なぜ我々は未来を語るのか?
Sub Title	Why do we predict the future?
Author	田所, 昌幸(Tadokoro, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会
Publication year	2021
Jtitle	法學政治學論究 : 法律・ 政治・ 社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.131, (2021. 12) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20211215-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

なぜ我々は未来を語るのか？

田所昌幸

はじめに
一　先回りされる未来
二　設計される未来
三　信仰される未来
四　実験される未来
むすび

はじめに

「こんなに大事になるなら、どうして誰も判らなかったのかしら?」二〇〇八年一一月、レーマンブラザーズ破綻をきっかけに世界中に広がった一〇〇年に一度とまで言われた金融危機の最中、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス（LSE）を訪れたエリザベス女王は、このように尋ねたという。[1] 今日の社会科学で、経済学ほど高度な科学的手法が導入されている分野もない。素人にはおよそ理解できない数理モデル統計モデルなどの高度な専門的技法を駆使して、世界中の優れた頭脳が市場の動向の行方を一歩でも先に読もうと、鎬を削っているのである。何せ市場の行方を読むことは、途方もないカネに結びつくのだから、優れた人材と豊富な資金が惜しげもなく投入されている分野でもある。なら、こんな大事がどうして予想できないのか。女王ならずとも、こんな疑問は当然だろう。

この女王の疑問に応えようと、英国アカデミーは有力な経済学者による検討を行い、翌年女王に公開書簡によって回答した。その書簡で、様々な専門家や当局者が危険を警告していたことを指摘し、こう締め括った。「金融危機のタイミングやその烈度の予見、およびその防止に失敗いたしましたことには、多くの理由がございますが、主として、内外の多くの有能な人々がシステム全体のリスクを理解する集合的な想像力の欠如によるものでございます。(a failure of collective imagination of many bright people)」[2] 経済学でも、正しい予想には「想像力」が必要だというのである。

経済学などまだ良い方かもしれない。自然科学同様の姿勢で複雑な数式や最新の情報処理理論を駆使し、時に多額の金銭的な利益と関係する現象を取り扱う経済学では、予測の精度について自然科学に匹敵する高い期待がされる。それに比べれば国際政治の予測に携わる人々は、そもそも期待が低いだけに気楽な立場にいるのかもしれない。次々

に生産される予想はジャーナリズムで消費され、外れたことが判明した頃にはそれは忘れられ、次の予想が何事もなかったかのように生産される。ジャーナリズムなどそもそもそんなものだというシニシズムは、世間では浸透している。だが予測の精度が悪い点では、センセーショナリズムを排して冷静に論ずることを自認している、アカデミズムに身を置く専門家も大同小異である。[3]

考えてみれば二〇世紀の国際政治上の重大事件は、大方想像を超えるものだった。第一次世界大戦は史上空前の組織的な殺戮だったが、その勃発を予想した専門家がその一〇年前にどれほどいただろうか。今となっては批判的に顧みられることが多いが、イギリス人のノーマン・エンジェルが『大いなる幻想』を書いて、今や戦争はあまりにも経済的、社会的コストが大きいので、このような不合理なことは起こりそうもないし、よしんば起こっても短期間に終わるはずだと論じたのは、第一次世界大戦勃発のわずか五年前の一九〇九年のことである。

その第一次世界大戦の直接のきっかけとなったオーストリア皇太子が暗殺されたサラエボ事件は、計画はずさんだし、皇太子夫妻を乗せた自動車が故障し、おまけに運転手が道を間違ったといった様々な、予想不可能な偶然がなければ起こりえなかった。

またサラエボ事件後も、多くの人々は大戦を予想はせず、休暇にでかけた指導者たちもいた。知識人たちも大同小異だった。オーストリア人の作家であるツヴァイクは、ちょうど休暇をベルギーの海水浴場で過ごしていた。よしんばドイツとフランスが戦ってもベルギーの中立をドイツが侵害することはないと固く信じていたし、現に周りには何千何万のドイツ人が休暇を楽しんでいたのである。ツヴァイクは不安げなベルギー人にこう言い放った。「君たちベルギー人はのほほんと落ち着いておれますよ！　……もしドイツがベルギーに侵入したならば、私をここのこの街灯に縛り首にしてもいいですよ！」[4]

ささいとしか思えない出来事が、巨大な帰結に発展しただけに、国際政治学者によって膨大な量の研究が第一次世

界大戦の勃発について行われてきた。そしてもしこれが起こらなければ、ロシア革命もナチによるドイツ支配も実現しなかったはずで、そうなるとその後の世界がどのようなものになったのかを検討する有力な学者もいる。(5)

第二次世界大戦はどうか。第一次世界大戦の勃発が、多分に偶発的な出来事の連鎖の結果とされる見解が依然有力なのに対して、第二次世界大戦はヒトラーによる野望の必然的結果であり、それに日本軍国主義が便乗したものとの見方が強い。錯誤によって始まった無益な戦争として理解されることが多い第一次世界大戦に比べて、第二次世界大戦は、邪悪で好戦的な指導者に支配されたドイツや、軍国主義にどっぷり浸かっていた膨張主義的な日本のような国に、国際社会が断固として立ち向かわなかったのが、戦争の原因だとされることが多い。

確かにこの戦争はより予測しやすかったかもしれない。しかし、ドイツや日本は好戦的だったにしても、結局は敗戦に至ることを予測できていれば自滅的な戦争を始めたのだろうか？　ヒトラーがスターリンとの間で独ソ不可侵条約を結んだことは驚きをもって迎えられ、当時の日本の首相・平沼騏一郎は「複雑怪奇」という言葉を残して辞職した。しかもそれからわずか二年足らずの間に、ドイツはソ連に攻撃をかけて自らの墓穴を掘ることになった。

ヒトラーの攻撃性を早くから警告し、その後イギリスを対独戦の勝利へと導いたチャーチルは、荒野の預言者としてその見識はのちに高く評価されることになる。しかし、そのチャーチルは、第一次世界大戦中は海相としてガリポリ作戦で、一九二〇年代には蔵相として金本位制への復帰で、ともに大きな見込み違いをしている。第二次大戦後も、ガンジーをヒトラーと同一視してインド独立に反対したことを考えると、チャーチルの予測の成績も必ずしも芳しいものとはいえない。いずれにせよ、もしヒトラーがいなければ、後にチャーチルの先見の明が高く評価されることはなかったであろう。

しかも第二次世界大戦後には、独日に対抗して戦った大同盟は崩れて、米ソ間で冷戦が始まることに至っては、どうだろうか。米ソのイデオロギー的な両立が不可能である以上、冷戦はあとから考えれば当然のようにも見えるかも

しれない。しかしそれを予見できた人は戦争末期に至っても決して多かったわけではなかったし、戦後になっても戦勝大国の協調によって、第二次世界大戦後の世界秩序を維持しようという努力が、相当数のアメリカの当局者によって続けられたのである。

二〇世紀の国際政治史の主要な出来事であるこれら三つの大戦争ですら、それが一〇年前はもちろん、数年前にも多数の有力な専門家によって予測されていたわけではない。かくのごとく、人が国際政治上の出来事を予見する力は、非常に限られている。むしろ国際政治における未来予測の歴史は、失敗のオンパレードの様相を呈していて、残念ながら国際政治学者は、物理学者はもちろん、経済学者ほどの予知能力はなく、専門家としての権威もその分劣ると言えるのかもしれない。

上述のように、社会現象についての未来予測の精度は低いし、そのことはよく知られている。にもかかわらず、なぜかくも多くの未来に関する言説が流布しているのだろうか？　未来論は旺盛な需要があり、それは大量に消費されてきたし、現在もそれが衰えている兆しはない。人は「未来」について語らずにはおれない。この小論では、未来論に何が求められてきたのかを検討する。それを通じて、不確実な未来について我々が語る際に、なにがしかの知的な手がかりを得ることが、目的である。

一　先回りされる未来

未来論が求められる理由として最初に思いつくのは、未来が予知できれば有益だからというものだ。相場にせよギャンブルにせよ、正確に予知できれば確実に利益が得られよう。資本主義そのものが将来の見通しを活発に取引する動的な制度であり、未来の利益予測に基づいて起業が行われ投資が行われる。そして事業の将来性が株式市場で売

買され、一国のマクロ的な経済状況が外国為替市場では取引される。将来に対する様々な予測（経済学では期待という言葉が使われる）は、現在の価格に織り込まれ、いち早くそれを察知することで、大きな利益を得ることができるのだ。経済学に正確な予想を期待するのは、そう考えれば当然のことだろう。

国際政治上の出来事も予想できれば、非常に有益なことは言をまたない。戦争が起こると予知できれば、自国の安全保障に有益なのは当然だし、どこかの国で政変があるとか、どの国で内戦が起こるとかがわかれば、様々な対策を講じることができるだろう。政府の情報機関も民間のシンクタンクや学者も、そのために情報を収集し分析して、現在の選択を絶えず調節し、行動を決定している。

具体的な事象を予知できなくとも、「歴史の流れ」「歴史の必然」を知ることができれば、歴史の勝者の側に所属することができる。戦争や革命で敗者となれば、その不利益が大きいのは明らかで、逆に歴史の波にうまく乗れば、様々な悪行もしばしば都合よく忘れ去られる。

ここまでは当然すぎて改めて言うまでもない。しかし問題は、第一に社会的現象は複雑すぎて、一般に予測の精度は著しく低いことである。それでも予測を聞きたいのは、予知できようができまいが人は常に決定を迫られているからである。会社が新たな投資をするとき、国家が新たな兵器を導入するとき、そして人が住宅ローンを組む時ですら、それが適切かどうかは不確実な将来に依存する。不確実だから、何もしないというのも、それ自身一つの決定である。予測は、現在の行動を決定するのを助けることが期待されており、その意味では予測が実現するかどうかにかかわらず必要とされるのである。

不確実性に対処するために、現代の社会が著しく依存しているのが、確率や統計的手法である。実際ギャンブルは典型的な確率の世界だ。確率論や統計学の教科書でもサイコロやトランプの例が頻繁に使われている。優れた数学者は、賭けのルールと確率の間の僅かな間隙をついて、儲けることができる。自然科学では確率論的なモデルは当然に

使われているし、医学でも疫学は確率論的モデルに依存している。社会現象への応用では、経済学の重要な一部となっていて、複雑な金融工学も確率モデルがなければ成立しないのではないだろうか。

政治学も科学的であるべきだという要請は強いので、統計学的手法を用いた「エビデンスに基づく仮説検証」が、とりわけアメリカの大学院で教育を受けた若い世代の研究者の標準的な手法になりつつある。しかもコンピューターの計算能力が著しく向上したので、統計的な分析手法の訓練を受けていない人にでも、データさえ入力できればコンピューターのソフトウェアによって、簡便にともかく一定の答えは出せるようになったことが、こういった手法の展開に大いに寄与してきた。国際政治分析にもその傾向はあるが、流石に実際の外交政策の決定を社会工学の専門家が作るモデルに委ねようという声は、まだ少ない。

エビデンスに基づく議論が合理的だとしても、エビデンスは観測によって得られなくてはなるまい。しかし言うまでもなく未来そのものは観測できないから、それは過去に観測された出来事のパターンが、同じ条件のもとでは、観測できない未来でも繰り返されるはずだ、という斉一性が前提とされている。もちろんこういった態度それ自身は統計や確率といった厳格な方法論に限ったことではなく、経験論的な思考様式が一般に前提としていることにすぎない。統計や確率といった手続きがきちんと定式化されているフォーマルな方法で結論を出せば、観測結果を恣意的に用いて、直近の経験や何らかの理由で現在強く意識されている経験から、歪んだ「歴史の教訓」を語ることを避けることができるという利点がある。

しかし厄介なのは、「同じ条件」ということである。「同じ」というのは、厳格に考えれば、問題となっている事象を左右するすべての条件が等しいということになるが、すべての条件を検討することはもちろん、問題となっている事象を支配している条件が何なのかを網羅的に知ることも、全能の神ならぬ人間には凡そ不可能なことと言わねばならない。大戦争といった国際政治上の重大現象がどんな時に起こるのかについては、無数の検討がされてきたが、第

一次及び第二次の世界大戦という僅か二〇年前後して起こった二〇世紀の大戦争に限っても、その勃発を支配した条件は多すぎ、それらは相互に複雑に関係している。我々にできるのは、せいぜい少数の主要な条件、意味のある条件を取り出して、検討するくらいのことしかできない。そして往々にして、我々の関心は観測しやすいデータ、処理しやすいデータに向かいがちで、それによって結論にゆがみや恣意性が混入することは、避けがたい。

より本質的に難しいのは、未来の国際政治を支配するのが、同じ条件かどうかも誰にもわからないことである。我々は過去に経験した事柄についての知識から未来を推測することしかできない。しかし過去と未来の斉一性がどの程度のものなのかは、原理的には知りえない。我々が同じ概念で把握している現象も、どれも厳格に「同じ」ではありえない。例えば「戦争」と呼ばれる国際政治上の最大の関心事も、厳密な意味で同じではない。冷戦ははたして「戦争」なのだろうか。内戦はどうなのだろうか。内戦と騒乱と犯罪はどこで区別するのだろうか。サイコロの目やトランプの手札の分配なら何が「同じ」で何が違うのかは、あらかじめはっきりとした約束事によって決められている。しかし我々が未来予測に期待する知識は、類似性や連続性があってもユニークな一回限りという性格の強い事象についての理解である。ましてや有限の一回限りの人生を生きる人間が、不確実な環境で行う迫られる決断は、確率モデルに全てを委ねられるような性格のものとは言えまい。

最後に自然現象とは違う社会現象の未来予測に付きまとう問題に、再帰性問題がある。株式相場や自然現象なら、われわれは何が正確な予測で、何が間違った予測なのかは、事後的にははっきり知ることができる。翌日の株価にせよ天気にせよ、それは翌日になれば、それをまず確実に知ることができるからだ。それによって現実には買わなかった株を買っていた場合には、どれほど利益が得られたか、現実には持っていかなかった傘を持っていくと、どうなったかという実現しなかった未来や、仮想的な未来を構成することも比較的容易であり、それによって予測の意義や価値も実感できる。

だが、人間が直面する選択は、往々にしてそのような性格のものではない。戦争が起こるだろう、金融恐慌が起こるだろう、また試験に不合格になるだろうといったたぐいの予測は、予測そのものが事象に影響を与え、未来を変えてしまう。金融恐慌は、しばしば自己実現的で、ある銀行が危ないと多くの人々が思えば、実際に取り付け騒ぎを誘発して銀行は危機に陥る。だからこそ、金融当局は、危機を予測してもそれを口にすることはできない。逆に信用システムの安定性を過信すれば、リスクへの警戒が緩み、やはり結果的には金融危機を誘発するのかもしれない。

国際政治でも、他国からの侵略を予想して自国の軍備を増強すれば、それ自身が相手国の対抗的行動を招いて、かえって緊張を助長するかもしれない。これは安全保障のジレンマとしてよく知られている現象である。まったく逆に、戦争の危険が意識されれば、関係者の行動が抑止され、実際には戦争が回避されるかもしれない。金融市場の過熱も、それが言われれば言われるほど人々が慎重になり、金融危機が回避されるかもしれない。予測という行為そのものが現実の一部であり、人々の行動に影響しつつ未来が形成されるのが、社会的現象の特徴である。地球温暖化の将来予測も、同様のメカニズムが作用するだろう。つまり予測には自己実現的であることも、逆に自己破壊的なこともありうる。

それは気象や天体の運行のように人間からなる社会の未来を予知しようとする立場からは、再帰性問題として知られる難題だ。しかし同時に、人間がコンピューターのＣＰＵのように入力された情報を処理して受動的に反応するだけではなく、環境に働きかけ、少なくともある程度は未来の在り方に影響を及ぼし、自分を乗り越えて未来に働きかけようとする存在である限り、それは人間の基本的な条件である。未来は完全には対象化できない。なぜなら、「未来という領域は、我々の知識に受動的な形で提示される対象ではない」からだ。(6)

二　設計される未来

日常的な素朴な意識では、我々は常に未来を予測しながらそれを選択している。だからこそ、巨大な昆虫に自分の姿が変わってしまうカフカの小説のようなまったく理解できない未来を前提に人が直面すれば、正気を保つのすら難しいだろう。駅のプラットホームから線路に飛び降りるかどうか、店でどんな商品を買うのか、どれほどの額を貯金するのか、選挙で誰に投票するのか。それぞれ自分の行動を選ぶことによって、未来がある程度は制御できる、少なくとも未来を異なったものになりうるという感覚をまったく持たずに、人は日常を生きることはできまい。

未来予測は正確な予知を目的とするのではなく、何らかの望ましい未来を構築するために未来に働きかける営みでもある。戦争や金融恐慌を予測することは、しばしばそういった破綻を避けるための警告が目的である。感染症予測において一定の条件で感染爆発を予測するのは、今の時点で対策を講じなければ恐るべき未来が実現することを警告することで、そういった未来を回避することが目的である場合が多い。であれば、こういった「予測」が実現しないことは、むしろ目的にかなっていることになる。戦争や大恐慌といった恐るべき破綻を予測するものが多いのも、多くの場合それを避けるために現在において何を操作すべきかを訴えることが狙いとされている。

実際、望ましい未来を示し、そこに人々を誘導することはよく行われている。しかし逆にヴィジョンや構想といった名前がつくものも、単なる夢物語以上ものなら、そこには一定の予測の要素も含まれていることが前提になる。そのうえで、望ましい未来を実現するために何をするべきなのかを論ずることがこの種の未来論の目的である。

警告であれヴィジョンであれ、未来を制御することが目的だが、その点が一層強調されると、計画と呼ぶべき営みになるだろう。国家による経済計画や社会設計主義は、反共主義者だけではなく市場経済への信頼が強い時代には危

険思想扱いされたくらいで、二〇世紀のイデオロギーを二分した社会主義と資本主義との対比も、集合的計画と個人の自由との間の争いともみることができる。ソ連型の社会主義が見事に破綻したのは事実だが、いかなる国家も一定の計画を常に実行している。原爆を開発したマンハッタン計画はよく知られている国家主導の巨大プロジェクトだが、道路などのインフラであれ公立学校の建設であれ、利用可能な資源を組織的に分配して、予測される将来の必要に応じ、福祉であれ国力であれはたまた体制維持であれ、望ましい未来を実現することは、日常的な営みだ。

「計画」は国家だけではなく、民間の様々な組織や家族でも行われている、非常にありきたりの活動である。企業は市場の需給環境に受動的に反応して最適化するだけではない。将来の生産計画や事業計画に応じて、あらかじめ設備投資をして人員を補充する。日常に追われる家庭でも、住宅や自動車などの高額な買い物や、貯金やローンなどは、ライフスタイルの計画とみることもできる。

しかし理想の家、持ちたい自動車を自由に買うことができないように、望ましい未来を語るだけなら、夢物語にすぎない。そうでない限り、計画には将来利用可能な資源や技術水準など、計画が実現される様々な条件について、一定の予測の要素が確実に含まれているはずである。すべてを思いのままに選ぶことができないのが、人の世の常である。計画には、逆説的にも一定の制約を自覚するという要素がある。その制約のもとで何らかの最適な未来を達成しようとするのが、個人であれ集団であれ避けられない。

もちろんこういった制約条件をすべて正確に予知することも普通不可能であり、そのことが未来を設計しようとする現在の営みの限界になる。さらに操作できる変数間の関係も、完全に知られていることはまずないので、予想外の出来事が起こるのが普通である。

こういった計画の実効性の限界以上に留意しないといけないのは、未来を設計しているのは現在であり、未来において人が何を望ましいと考えるのかも、予測でしかないことである。しかも我々が常にしている選択は、何らかの形

で将来の世代を確実に制約する以上、規範的な意味について無関心たり得ない。良かれと思ってしたことが、次の世代にとって無意味になったり、かえって有害になったりすることも少なくない。かつて計画したインフラが無意味になったり、財政上、環境上の負債になったりすることもあろう。広大な帝国を後世に残すことは光栄ある計画だったかもしれないが、次の世代にとっては歴史的負債となって呪いの対象となるかもしれない。過去の偉人の銅像やモニュメントが怨念の対象として引き倒されることを、我々は目にしている。長期にわたる大規模な計画が、予定通りに実現することはまずないが、逆に計画がより実効性が高く未来が確実に制御できるようになれば、将来の世代の自由を侵害する結果に至るリスクも高まることになる。未来を現在の世代の理想で制御するのなら、期せずして保守的な世界が実現することになる。(7)

三　信仰される未来

世界にはさまざまな民族が実に多様な文化、宗教、言語そして政治的価値を持っているが、いかなる民族も神話や宗教の形で世界の秩序についての物語を持っている。日常の忙しさからから解放されて空を見上げるとき、肉親や友人の死を体験したとき、人は自分自身の存在の有限性を思い出す。湧き上がる不安や恐怖を癒して、人生の意味を見出したいという欲求は、魂の渇きのようなものだ。おそらくそれは、「知性による死の発見」によってもたらされたものなのであろう。「生前の無から現れ、死後の暗闇に没していく」(8)ことが避けられないと悟った人間は、自分がどこから来てどこに行くのか。それについて、合理的な答えが出ないことはわかっていても、問わないわけにはいかない。

伝統的には宗教がこういった、自己確認のための役割を担ってきた。神という超越的で無限の存在を措定し、この

世を超えた彼岸の世界を信じることで、人は恐怖や苦難を乗り越える力も得てきた。我々が死を語彙に持っていなければ、おそらく文明も生まれていまい。また偉大な芸術も文学も創作されなかったのではないか。そして神を共有する人々の間で、巨大なプロジェクトのために協力することもできた。国家の権力を正統化し人々を動員するために、神は利用もできた。だからこそ合理的には正しいことを証明しようのない宗教は、それを共有しない人々の間で、おびただしい殺戮と迫害の原因ともなってきた。人間の病理と創造性は紙一重のところで隣合わせに存在しているのである。

超自然的な声を聴くことで運命を知り、不確実な条件の下での決断に役立てようとする試みが、あらゆる文明で繰り広げられてきた。よく知られている例では、古代ギリシアのデルフィの神託所は、紀元前八世紀から紀元後四世紀に至るまで、一〇〇〇年以上機能し続けた。この神託所が広く支持を受けていた証左であろう。[9]

しかしここで得られた託宣の予測が的中したはずはない。ヘロドトスは、リディア王のクロイソスが、莫大な奉納金とともにペルシア侵攻について伺いを立てたところ、ペルシアに出兵すれば、大帝国を亡ぼすことになるだろうという神託を得たことを記録している。しかし実際に出兵したクロイソスは大敗し、危うく火あぶりで処刑されそうになったが、突如始まった嵐がもたらした豪雨で、命拾いをした。クロイソスは、デルフィに使者を送って、なぜよく神に仕えた者をだましたのかを質したとのことである。

神託はピュティアと呼ばれる巫女がゼウスの声を伝えることで得られることになっているのだが、現実にはピュティアの発する声は意味をなさない叫び声だったようで、その声を書き取り、特定の様式の韻文にまとめる神官の役割が欠かせないものだった。しかも、この韻文そのものが「問われた内容に漠然と関係していそうだというだけで、意味としてはまったく理解不能」な代物だった。そのため、神官が語る予言は、結局のところいかようにも解釈の余地のあるものだった。

前述のクロイソスの非難に対しても、デルフィの巫女（実際は神官）は、大帝国を亡ぼすとは言ったが、その大帝国とはペルシアではなくリディアのことであり、「託宣の意味を悟らず、また問い直しもしなかった自分に罪を着せる」べきだとし、また神は火あぶりの刑からは救ってやったではないかと答えたという。[10] 予言が外れても、それは解釈の誤りとして片づけられたのだが、興味深いことにクロイソス自身も、その託宣に納得して反省してしまったとヘロドトスは記している。

神託に権威があり、しかもそれがいかようにも解釈できるとなると、その解釈が政治的色彩を帯びてくるのは理の当然である。紀元前六世紀のギリシアで、ペルシアの軍勢を迎え撃ったテミストクレスは、住民をアテナイから退避させる一方で、サラミス島に艦隊を集結して、海上で決戦を挑むという奇策に出た。だがそれを実行するにはアテナイの民会で合意を取り付けなくてはならない。「アテナイ人に自分たちの都市の明け渡しを納得させられるような権威があるとすれば、それは神様、デルポイのアポロンしかいない。そして、この事態にあたって神様を出し抜くことができる人間がいるとすれば、それは天才しかいない。[11]」デルフィの神官たちは、ペルシアの有利を確信していたのか、まずアテナイの神託使に対して全く絶望的な予言をして、危機感を高めた。翌日もっとよいお告げを得るまでここを動かないとアテナイの神託使が祈願すると、「ゼウスは木の壁をば、唯一不落の砦とし、汝と汝の子らを救うべく賜るであろうぞ。……おお聖なるサラミスよ。……そなたらは汝の子らを亡ぼすであろう。」と、少しは希望の残る神託を与えた。[12]

問題は「木の壁」とは何かがはっきりしないことで、これはアクロポリスを囲む茨の生垣だから籠城すべきだとする保守派に対して、テミストクレスはこれがギリシアの艦隊のことだから、海戦に打って出るべきだと主張した。しかし末尾の不吉な言葉は、海戦でギリシアが敗北することを予言してはいないだろうか。テミストクレスは、「非情なる」ではなく「聖なる」サラミスと呼んでいるのだから、ここで予言されているのは敵が亡びることなのだと論じ

た。[13] いずれにせよ、テミストクレスは見事にペルシアを打ち負かしたが、仮に彼が敗れても「正しい」神託の解釈は難なくできたであろう。そしてその場合は、デルフィの神託所は、勝者であるペルシアからも尊重されることになったのではないだろうか。

その後もデルフィの神託所は繁栄した。「ペロポネソス戦争を通じて、デルフィ神託所は、ギリシア人のあいだに対立関係を維持しようと努めた。なるほど、神託所にとっては戦争ほどうまい話はない。双方の側が抗争の成り行きをめぐって自分たちに有利な意見を頂戴しようと、争うように神託所を訪れるからだ。[14]」各地からポリスの代表団が訪れるデルフィは、ギリシアのポリスを結ぶ外交の中心となり、「デルフィ神殿は、古代地中海世界のジュネーブ国連本部といった趣を呈し、そこでは、絶えず往来する外交使節、商人、旅行者、巡礼者らの口を通じて、地中海各地のあらゆる政治動向を正確に把握することができた。神託の預かり手もすべてこうしたデータを加味したうえで、まさに事情通としての予言を与えることができたわけであり、その見通しの正しさによって、伺いを立てた者たちを驚かせることもできたのである。デルフィとは、未来が現在のなかに突如姿を現し、未来の決定事項を現在に告げる場所だったのである。ほかに例を見ない「フューチュロクラシー（未来による支配）」の実現と言ってよいであろう。[15]」

占術や神託の在り方を、冷めた目で見ていた人々も古代にももちろんいた。紀元前一世紀のローマでは、独裁者が次々に血みどろの権力闘争を繰り返し、人々は不安のうちに未来の兆候をつかもうとして、占いが大流行した。この時代の哲学者であるキケロは「予言について」（De divinatione）と題する対話篇で、第一巻では弟のククィントゥスの口から擁護論を展開させる。そのうえで、第二巻で自身の批判論を今日の常識からみてもいたって合理的に述べ、「もしすべてが運命に依拠しているとしたら、予言などをして何の役にたつのだろうか？　占い師が予言したことは、すべて間違いなく起こるのだから」と言い切る。[16]

しかし、そのキケロにしても自身ト鳥官を務めたし、国家の宗教を維持するために、占いによる予言の権威も尊重

されるべきだとする。[17] それは政治的方便だというのである。実際占いは、「個人や集団に実際的な行動の指針を与え、危機や決定に際して、彼らに神々の存在と人々への善意や配慮を確信させる」効果があった。実際国家分裂の危機に際して、政治制度や政治運営への信頼を回復させることで、パニックを回避した事例を指摘する学者もいる。[18]

占いによる予言がおよそ信頼できるものではないことを多くの人々が知りつつも、今日に至るまで職業として占い師が絶えることがないのは、このような個人や集団への「癒し」への需要がなくなることがないからであろう。予言者たちももちろんこれを心得ている。一九世紀前半のフランスでは、女性によるトランプ占いが隆盛をみたが、ある有名な占い師は自分の仕事を以下のように見事に分析している。「占術は、心の苦しみを抱くすべての人のために用意された照準です。占いの部屋は、今という時の重みに耐えかねた心弱き人間にとって、数少ない希望の星なのです。たいていの人は未来に目を向けることを好みます。未来の曖昧模糊とした部分に光を当て、そのなかから自分の幸福につながりそうなものをはっきりと見定めておきたいと思うからです。」「私たちは、医師、あるいは贖罪司祭のような存在なのです。すべてを聞き出し、すべてを見抜き、そして黙するのです。[19]」

近代ヨーロッパでは、占いや宗教に代わって、形而上学や歴史哲学が未来論の基礎になった。啓蒙思想は、人類の進歩を説き、個人の人生は限られたものであっても、理性に導かれて人類の自由は発展し、よりよい未来へと歩む道のりだとする世界観を人々に提供してきた。こういった形而上学的未来論を、科学的予言として展開したのがマルクス主義である。よく指摘されることだが、マルクス主義にはキリスト教的な終末論を世俗化した面がある。革命によって共産主義が実現されると、天国ではなくこの世で人類は最終的に救済されることが約束されている。

マルクス主義が予言したはずの、輝かしい共産主義社会は、革命後のソ連でもいつまでもたっても到来しなかった。しかし、それでも貧困や戦争にあふれている現実に代わって、輝かしい未来の到来を約束する予言は、歴史の勝者の側の一員として戦い続けることが、人生を意義あらしめることになるという救いを、貧困であれ、差別であれ、理不

尽な暴力であれ、苦悩だらけの現実を生きねばならない人々に与えた。しかも現実との矛盾こそが歴史を動かすエンジンになると教えた弁証法は、多くの優れた知性の持ち主をひきつけ、未来に向けた解放のための闘争へと駆り立てた。

未来に現在の意義を求めようとする姿勢は、もちろんマルクス主義に限られたものではない。自分の生まれ育った国や民族の将来、自分の築いた王朝の繁栄、自分の家族や親しい人々の将来や次の世代の運命は人々の関心事であり、ときにはそういった未来が多くの人々を団結させるとともに、異なった過去の記憶だけではなく、異なった未来をめぐる争いも起こってきた。人は皆自分がいずれこの世から消えるが、人類や国や家族といったいわば拡張された自己の未来は、今を生きる人々にとっても必要とされ続けれるのだろう。

今日の学問的、科学的な予測を、占いになぞらえれば、当然強い反発があるだろう。確かに科学的認識は、確認できる根拠を基礎にした合理的な推論である。根拠となる情報や推論の過程は開示され、原理的には誰でも理解可能で、常に批判可能かつ検証可能である。その意味で、一部の聖職者による霊的な断定とは違う。

だが、科学的かつ合理的であっても社会現象の予測の精度が期待外れのものであることは、すでに述べたとおりである。戦争の帰趨や景気の動向はもちろん、感染症の動向ですら、多数の条件が複雑に作用し、しかも人間の行動に左右される現象に、専門家が専門的知見に基づいて語ることができるのは、実は限られた範囲の事象に限定される。

科学的推論は境界条件や前提条件を付けたうえで、一定の蓋然性や方向性を語ることしかできないだろう。そうなると、戦争は起こるのか、次の不況はいつなのか、といった問いを発する人々に意味のある形で明確に答えることができることはまれで、予測は大幅な解釈の余地を残すものとなる。

とりわけ最新の科学的予測の解釈は、ますます予測の需要家たる素人の手には検証できない複雑なものとなっている。歴史的類推ならその説得力も不確かさも実感するのに、常識さえあれば専門的訓練は不要かもしれない。しかし

複雑な数理モデルや統計処理のプロセスは多くの場合素人にはブラックボックスだし、ましてやＡＩを駆使した深層学習となると、そこで介在する情報量や論理プロセスは、いかなる専門家にも追跡できない大規模なものになる。それらの予測結果は解釈も簡単ではないかもしれないし、その評価は専門家コミュニティの検討にどうしても依存せざるを得ないが、専門家も常に意見が一致するわけではない。そして、ますます深くなるとともに、その結果狭くなる専門的知見の範囲を考えると、そもそも誰が信頼に足る専門家としての資格があるのかについても、意見が分かれても不思議ではないだろう。

結局のところ話は、誰が信用できそうかという問題に行きつきそうである。複雑で不確実な未来をめぐる決定に迫られた人々が、専門家の権威を頼りに予測の信頼性を判断する姿は、神託を頼りに政治的決定を行った古代ギリシアの人びとの姿と、どれほど違うのだろうか。グローバルランキングの高さを誇る大学の威厳や、素人にはその内部がうかがい知れないＡＩは、さながらデルフィの神殿の姿のようでもある。

いずれにせよ、こういった未来論を需要しているのは現在の生きている人間である。どれほど豊富な情報があり、優れた知識があっても、人間が、個人であっても集団であっても、本質的に不確実な未来について行う選択から賭けの要素を払拭することはできない。受験、就職、結婚といった人生上の決断をするのに、依然として多くの人々が神社でおみくじを買い、占い師に占ってもらうのは、重い政治的決断に迫られる政治指導者が高名な専門家を顧問として雇い、困難な経営判断を行う経営者がコンサルタントに料金を支払うのと、心理としてはさして違わないのかもしれない。歴史という名の過去とともに、希望や宿命という名の未来も、今の意義を確かめるために人は求めるものだから。

四　実験される未来

自己確認のために未来を求めるのは、個人や集団の不安を癒すという現在のニーズにこたえるためなのに対して、逆に現在から距離をとるための知的実験としての役割が、未来論に託されることもある。時間は過去から未来へと一方向にしか進まないから、現実の出来事はやり直しのできない一回限りのユニークなものである。しかし多様な未来や多様な過去を想像することは、我々が縛り付けられている現在から距離をとって、様々な可能性を検討するための試みととらえることができる。

可能性としての未来を紡ぎだす努力は、未来と過去の間の境界線にあるいわば極限値にすぎない現在に拘束されがちな我々の意識を、より広い可能性に向けて開放する知的な努力を表している。いわば現在から距離をとるための知的冒険なのである。

よく言われるように、歴史研究のために実験はできない。第一次世界大戦の原因を究明したければ、もう一度一九一四年の六月の状態を再現して、様々な条件を変化させたうえで、その結果を観察すればよいのだろう。しかし、もちろんそんなことは不可能である。そのため広く行われているのは、反実仮想をすることである。いうまでもなく、歴史研究は実際に起こったことの分析であって、「歴史のifは意味がない」としばしば言われるように、起こらなかったことを歴史の検討に導入することには抵抗は大きい。しかし、我々はある出来事が他の出来事の原因であるという語る場合、暗黙裡にその原因がなかった場合の仮想的な状態を想定している。実際反実仮想を、明示的に展開する歴史家もいる。[20] こういった思考実験を、未来に対して行うのが未来予測に他ならない。

非常に限定的な形だが、人間の行動を扱う社会現象についても一定の実験的手法を導入する試みもある。心理学で

は、一定の制御された条件の下で、被験者の反応を観察し、条件を変えてどうなるかという実験的手法が、ごく普通にとられている。また、複数の未来を想起し、それがどのようなものになるのか、それらが生起する条件や、蓋然性を考えることは、軍隊では図上演習の形で、体系的に行われている。軍隊は大きな組織であり、多数の人員や装備を限られた時間で、しかも厳しい条件の中で運用し、それによって目標を達成することが求められている。そのためには、事前に様々な事態を想定して、装備を準備し、人員を訓練し、そして組織的に行動できるための作戦計画を多数立案しておかなくてはならない。

軍隊の中核的関心は、もちろん武力紛争が生起した際に、よりよく任務を遂行することである。普通は戦闘での勝利がゴールであり、そのための手段は様々な種類の兵力である。その意味ではじめと終わり、勝ちと負け、動員できる手段などが、比較的明確なので、未来についての検討も輪郭のはっきりとしたものとなる。だがそこでは単一の未来が描かれるのではなく、複数に可能態としての未来がどのように立ち現れるのかを観察し、そこから得られた未来像を、現在の作戦計画や装備訓練などに反映させることが、期待されている。様々な防災計画や避難計画なども、類似の発想のものだ。

規模がより大きく多様な要素が介在し、時間軸も長く結果の評価も複雑な未来についての思考実験は、図上演習のようにはいかない。フォーマルな数理モデルやゲーム理論の応用による未来予測なら、厳格な論理の展開によって解を求めることができ、恣意的な認識のゆがみを避けることができよう。しかし当然のことながら、モデルは現実に近づけようと思えば、多数の変数からなる複雑な形をしたものとなり、解が容易に出ないだろう。こういった難点は、経済学の市場分析でも経験済みで、それを国際政治に応用すれば、その困難は一層大きくなる。

解析的には解が求められないモデルや、確率論的なモデルの場合には、コンピューターの仮想空間でのシミュレーションを繰り返すことで、未来の行方について洞察を得ようとする試みもなされている。よく知られている例では、

ローマクラブによるレポート、「成長の限界」では数値シミュレーションが大きな役割を果たしているし、地球温暖化をめぐる議論でも、シミュレーションの結果は、すでに現実の巨大な影響を国際政治にも国際経済にも及ぼしている。これはいわばサイバー空間で仮想的な実験を行うようなもので、コンピューターは、数多くの異なった条件の下で、倦むことなく解を算出してくれる。[21] もちろん、社会現象の場合すでに述べた再帰性問題があるため、「シミュレーションの結果が本当に正しかったのかどうかは検証不可能」[22]だが、これによって可能態としての複数の未来を提示できるし、それによって思わぬ未来の可能性を発見することもあるだろう。

それでもこういった手法は、何らかの方法で変数をモデルに入力できなければ、実行不可能である。そしてそのこと自身が、一つのバイアスを生む可能性がある。人間にとって意味のある情報をコンピューターに入力できる記号や数字に表現するには、どうしても限界はある。商品の価格や量と同様、戦争の数や戦死者の数は数えられるかもしれないが、その倫理的意味や文化的効果は結局人間の判断によるしかない。よって社会現象や国際政治の分野に応用するには、相当の単純化が避けられない。十分に豊かな未来像を得るには明らかな限界がある。

仮想的な未来、可能態としての未来を人間にとって意味のある形で表出するのに伝統的に広く用いられてきたのは、説得力のある未来シナリオを複数描くことである。石油メジャーのシェルは一九七〇年代からシナリオ方式で未来を検討し、そのシナリオの多くを公開してきた。例えば、一九九二年から二〇二〇年までのビジネス環境を展望したグローバルシナリオ（Global Scenarios）では、その狙いとして以下の三点があげられている。

第一に、時代の大きな非連続や突然の変化に、我々が準備するのを助けること。第二に、（シェルのように世界中に従業員がいて、非常に分権的な会社で）未来を想像する際の共通の文化や言語になること。最後に、我々の持つ心理的地図（mental map）に挑戦することがあげられている。こういった既成概念への挑戦によって、新たな好機をつかむとともに、まだ顕在化していないリスクに備えることができる。[23]

このシェルのグローバルシナリオでは、政治的・経済的な自由化という冷戦後の巨大なトレンドを主要な起動因（drivers）として、それが順調に展開して好循環を生み、新たな革新と、ビジネス上の機会が生まれる「ニューフロンティア」シナリオと、他方で自由化に抵抗する勢力が台頭し、アイデンティティをめぐる政治的対立によって国家間でも国内でも分断が強まり、さらには市場秩序にも障壁が設けられる「バリケード」シナリオが提示されていた。シェルの意思決定に強い含意のあるエネルギーについては、前者の場合は、経済成長が加速するとともにエネルギー需要も高まるものの、技術革新によってエネルギー効率も高まることが想定されている。他方で、後者の場合は産油国の不安定化が強まり、石油価格は急上昇するとともに、環境やエネルギーの自給自足を目指して、エネルギー貿易に敵対的な環境が生まれるとしている。この段階でも環境面での制約についてはすでに相当の注意が払われているものの、シェール革命についてはもちろん言及はない。

様々なバイアスを避け、十分に広い可能性を織り込んで、いくつかのまとまったストーリーに集約する手法が、様々な形で工夫されてきた。シェルのシナリオプロジェクトでは、多様な出席者を招いて様々なワークショップを開催するとともに、それをシナリオにまとめ上げる優れた専門家チームが組織されている。[24] しかしどれほど多様な参加者と優れた作業チームがいても、所詮は人間である以上何らかのバイアスや、想像力の限界が避けられないのは、言うまでもない。

しかも、こういった未来論は未来小説と区別できるのだろうかという疑問が当然出てくるだろう。提起される未来像の成否は、それが実現されるかどうかによって勝負がつくわけではなく、受け取る側の評価次第となると、魅力のある未来のストーリーを語ろうとすればするほど、未来小説やＳＦ小説との区別は判然としなくなる。実際優れた近未来小説やＳＦ小説は、凡百の学問的未来論よりも、はるかに知的に刺激的であり、社会的影響力も大きい。[25]

歴史小説と学問的な歴史の区別にも微妙な部分があるように、この区別も一見するより複雑な問題を内包している。

もちろん、自分勝手に歴史的事実を書き換えては、学問の名には値しない。また複数の歴史が可能であることを認めても、歴史はいかようにも物語れるというシニシズムを受け入れる必要はあるまい。同様に、多様な未来が想像できるにせよ、あらゆる未来が望み次第で可能なわけではない。

加えて、歴史は確定しているが未来は不確定だというのは、厳密には正しくない。歴史はあくまで後世に再現された過去についての言説である。過去に起こった事象自体は確定しているかもしれないが、生起した無数の事象から何らかの資料によって確認できるものを、様々な基準にしたがって歴史家が取捨選択し、一つの物語にしたものが歴史である。学問的な意味での歴史は、新たな資料が利用可能になり、新たな分析視角が導入されることによって常に更新される余地がある。そして過去の姿は、未来像によっても影響を受けるだろう。「われわれは全員、未来が栄光にあふれていることを知っています。同志よ、変わり続けるのは過去なのです。[26]」こういったのは、ソ連の哲学者だそうだが、なるほどマルクス主義では未来はすでに決まっているので、未来像に合致するように歴史が操作されざるを得ない。同様に、未来像も過去の姿が更新されるにしたがって、絶えず更新されざるをえない。E・H・カーは歴史とは「未来と過去との対話である」という有名な言葉を残している。未来も過去も確定していない以上、ありうる未来を考えることは、ありえたかもしれない過去を考えることと同様に、SF作家に独占されるべきテーマではないだろう。

むすび

本稿では、未来予測に託される目的を、予測による、未来の利用、設計、不安の鎮静、知的探求という四種類に分類して検討した。社会現象、とりわけ国際政治上の現象に関する未来予測の精度は著しく低い。ゆえに知的に誠実で

あろうとすれば、テトロックが論ずるように、不確実な未来を語るのには謙虚であり、誤りを率直に認めて意見を修正していく柔軟性が求められよう。また不確実な所詮は限界のある未来についての予測では、専門的な知識の有無よりも、特定の分野を狭く深く追求する「ハリネズミ」よりも「生のもつ矛盾や曖昧さを不可避的なものと受け入れ」、幅広い折衷的な知恵を重んじる「狐」型の知的態度が有効であろう。[27]

しかし未来論に託されているものが、必ずしも正確に未来を予知することではない以上、その評価は必ずしも予知精度だけに限定される必要はない。どれほど優れた頭脳が精密な分析手法や計画手法をもって取り組んでも、世界に不確実性があることは避けることができない。そしてその不確実性は、人間の不安の源であるとともに、希望の根拠ともなる。未来を知的に誠実に語るには、不安も希望も引き受けることが求められ、それこそが主体としての人間の基本的な条件であろう。

宿命論のシニシズムにも未来への信仰に身をゆだねることを拒み続ける挑戦的な生命力こそ、政治には求められる。なぜなら「政治とは今後も変わることなく予見不可能な状況下で、不完全な認識のまま、取り返しのつかない選択をする技術であり続ける」からであり、「永遠の時の流れに身を置く人間にとって、未来の超克とは自分の運命を超えようとする意志であり、何が起ころうとも希望はなくならないという保障だから」[28]である。

（1）*Daily Telegraph*, November 05, 2008. http://www.telegraph.co.uk/news/newstopics/theroyalfamily/3386353/The-Queen-asks-why-no-one-saw-the-credit-crunch-coming.html

（2）Letter to the Queen on 22 July 2009 from Professor Tim Besley, http://www.britac.ac.uk/events/archive/forum-economy.cfm

（3）テトロックは、一定の手法で予測の精度を測定した結果、素人と専門家でスコアに大した差のないことを示している。Philip Tetlock, *Expert Political Judgement: How good is it? How can we know?* Princeton UP, revised version, 2017, chapter 3.

（4）シュテファン・ツヴァイク『昨日の世界1』みすず書房、一九七三年（一九四四）、三二六頁。
（5）Richard Ned Lebow, *Archduke Franz Ferdinand Lives! : A World without World War I*, St. Martin's Press, 2014.
（6）Bertrand de Jouvenel, *The Art of Conjecture*, Taylor and Francis, 2012（1967）. Kindle 版 p. 17.
（7）Fred Charles Iklé, "Can social predictions be evaluated?" in Daniel Bell and Stephen Graubard eds., *Toward the Year 2000*, MIT Press 1997（1967）.
（8）アーサー・ケストラー『ホロン革命』工作舎、一九八三年、四〇—四一頁。
（9）ジョルジュ・ミノワ『未来の歴史——古代の預言から未来研究まで』筑摩書房、二〇〇〇年、五八—五九頁（Georges Minois, *Histoire de l'avenir : des prophètes à la prospective*, Fayard, 1987）。
（10）ヘロドトス『歴史』第一巻91、中公バックス世界の名著Ⅴ、一九八〇年、九三頁。
（11）P．ファンデンベルク『神託——古代ギリシアを動かしたもの』河出書房、一九八二年、三一八頁。
（12）ファンデンベルク、三二三頁。
（13）プルタルコス『英雄伝』上、ちくま学芸文庫、一九九六年、一六三頁。
（14）ミノワ、六二頁。
（15）ミノワ、六三頁。
（16）ミノワ、一三七頁。Cicero, II, 8. キケロの書物については、以下の英文テキストを参照した。https://penelope.uchicago.edu/Thayer/E/Roman/Texts/Cicero/de_Divinatione/2*.html
（17）ミノワ、一三四頁。マティアス・ゲルツァー『キケロ』名古屋大学出版会、二〇一四年、二七四—二七七頁。Cicero, *On Divination, BookII*, 12.
（18）David Wardle, "Introduction and Historical Commentary", in *Cicero on Devination, Book1*, Clarendon Press, 2006, p. 3.
（19）ミノワ、五六三—五六四頁。
（20）例えば、Niall Ferguson, *Virtual history: Alternatives and counterfactuals*, Hachette UK, 2008. また反実仮想の適切な方法について論じたものに、以下の文献がある。Richard Ned Lebow, *Forbidden Fruit*, Princeton University Press, 2010.
（21）グローバルな公共財の供給問題に、シミュレーションの手法を導入しようとした試みとして、以下の文献がある。吉田和男、井堀利宏、瀬島誠編著『地球秩序のシミュレーション分析：グローバル公共財学の構築に向けて』日本評論社、二〇〇

九年。

(22) 廣瀬通孝、小木哲朗、田村善昭『シミュレーションの思想』東京大学出版会、二〇〇二年、二四二頁。

(23) *Global Scenarios 1992–2020 - Summary brochure*, 1993. https://www.shell.com/energy-and-innovation/the-energy-future/scenarios/new-lenses-on-the-future/earlier-scenarios.html なお、シナリオプラニングについては、城山英明、鈴木達治郎、角和昌浩著『日本の未来社会　エネルギー・環境と技術・政策』東信堂、二〇〇九年を参照。

(24) なお、筆者自身も何回かこのシェルのワークショップに出席している。

(25) 例えば、堺屋太一『油断！』日本経済新聞社、一九七五年、小松左京『日本沈没』光文社、一九七三年。古今多数書かれてきた未来戦争物語は、人騒がせなだけのものが多いが、優れた知的基礎にたったものもある。一例として、John Hackett and others, *The Third World War: a future history*, Macmillan, 1978（ジョン・ハケット他『第三次世界大戦』二見書房、一九八三年）.

(26) 山内昌之「歴史の表現と想像力」『アステイオン』17号、一九九〇年夏、一六頁。

(27) Tetlock, op. cit., p. 2. なお、「ハリネズミ」と「狐」という類型は、アイザイア・バーリンによるものである。Isaiah Berlin, *The Hedgehog and the Fox*, Weidenfeld and Nicolson, 1953（『ハリネズミと狐――「戦争と平和」の歴史哲学』岩波文庫、一九九七年）.

(28) Raymond Aron, *L'Opium des intellectuels*, Pluriel, 2010 (1955), p. 210, 193.

（たどころ　まさゆき、慶應義塾大学法学部教授）